
そ の 他

パリでの留学生生活を終えて

食物学科 土 居 幸 雄

Yukio Doi

筆者は平成3年度本学より援助を受け、パリ郊外にあるフランス国立科学研究庁に所属する酵素化学研究所で一年間留学生生活を体験する機会を得ました。授業や種々の雑務に追われる日常から離れ、研究生活に没頭することができたこの幸運な一年間、パリに暮らして感じたことなど筆の進むに任せて述べてゆこうと思います。

この研究所所長のパンタローニ博士とカーリエ博士は、小生が研究対象としているタンパク質（アクチン）の研究分野では著明な人で、アクチンがどのように重合してマイクロフィラメントと呼ばれるタンパク質の線維を形成するか、主に速度論的観点から詳細に調べています。筆者はこれまで細胞の中でこのアクチン重合の制御に関連しているゲルゾリンと呼ばれるタンパク質がどのようにアクチンと結合してその機能を果たしているかを調べることを目的とした研究をしてきました。この一年間は主にゲルゾリンとアクチン分子が結合して出来る複合体の構造にまとをしぼって実験をしました。たとえば、ある特定のアミノ酸側鎖とだけ選択的に反応する化学架橋剤を用いて、アクチン-ゲルゾリン複合体を固定することができた場合、これらの分子の接触面に存在するアミノ酸残基を同定することは可能です。また、ゲルゾリンには2分子のアクチンが結合することがわかっていますが、これらのアクチン分子がマイクロフィラメントに取り込まれた場合、立体的にどのような位置関係になっているのか推定することもできます。共通の研究対象を持った研究者がすぐそばにおり研究上での刺激も多く、また、整った研究環境にあって、久しぶりに研究生活を満喫する

ことができた一年間でした。

研究所はこじんまりした所帯で、両博士のグループのほかに、解糖系の酵素であるフォスホフラクトキナーゼや、アミノアシル-tRNA合成酵素のアロステリック機構の解明を目標とするグループが活発に研究を進めていました。週に1度のセミナー以外には特にこれといった行事はありませんでしたが、セミナーにはヨーロッパやアメリカから関連した研究者が集まり情報の交換がスムーズになされているのは通常の大きな研究所と変わりありません。研究所は国立で研究費の心配は余り無いという話で、うらやましいかぎりです。人によってはフランスの生命科学が、最近ではアメリカやドイツに比べると低調であるとして、その理由の一つに、社会主義的な体制から来る不平等をあげる人もいます。確かにモノー (J. L. Monod) やジャコブ (F. Jacob) のような分子生物学者が輩出した1950-60年代はもう少し活気が溢れていたかも知れません。個人的なレベルで考えた場合には、非常に大雑把にいうと、社会全体がゆったりとした生活を楽しんでいる状況でハングリー精神を持ち研究に情熱を燃やし続けることは容易に出来ることではなさそうです。

パリは京都と比べるともちろん大きな町ですが、東京や、大阪と比較するとだいぶ小さい感じを受けます。高速道路を15分も走ると広い麦畑やトウモロコシ畑が広がっており、東洋の島国から来た人間は「まだまだ土地が余っているなあ」と思わず溜息を漏らします。しばらく走り続けると原子力発電所の煙突のお化けのような建物が見えてくるのもいかにもフランスらしい光景でした。研究所は小生の住んでいたパリの家から30 Kmほど離れたところにあり、車で30-45分かかり通勤していました。パリ



白い氷河 (Glaciaire Noir) よりエクラン (Ecrain) 山系をのぞむ

には有名な地下鉄(メトロ)もはりめぐらされており、鉄道も発達しているのですが、ちょうど乗り継ぎに不便な位置関係にあったため車で通勤することになった次第です。

家からパリの町中に出かけるときには勿論メトロをよく使いましたが、パリの地下鉄は車中でのパフォーマンスなども多く、日本の地下鉄に比べると少々騒がしく汚いですがなかなか楽しいものでした。汚いと云えば、パリの町を歩くときにはくれぐれも足元に気を付けてください。最近の気の利いた旅行案内書などですでに御存じでしょうが、犬の“落とし物”がじつに多いのです。パリっ子の自慢の一つに犬の糞処理専用のオートバイを発明したのはパリジャンだということがあげられます。白バイのような大きなオートバイの前輪の横に真空掃除機のホースが取付けてあり、緑のダンディな制服を着た清掃人が路上に落ちている糞を目ざとく見つけては一つずつ吸い上げてゆきます。フランスは日本と比べると雨の日は多くないので落とし物がいつまでも残り、晴天が続いた日にはこのファン処理部隊の活躍がないと足の踏み場がなくなります。日本ではビニール袋を片手に犬の散歩をする人が多いようですが、この違いは一概に日本ではマナーが徹底しているためだとも言えないようです。パリのような古い町では昔から上下水道が発達していたためでしょう

か、週に何回かは道端の水道の元栓を開けて車道と歩行路の境にある排水溝に大量の水を流して掃除をします。このためかどうかは知りませんが、パリジャンは平気で道にゴミを捨てます。事実、排水溝の一部にペンキで犬の絵の描いてある区画がありました。勿論、そこに落とし物は見つからず、パリジャンの犬の糞がそれほど行き届いていないのが窺えました。もっとも犬にしてみれば、所構わずゴミを捨てる主人の仕草に習っているだけかも知れません。詳しい統計にもとずいた数値は知りませんが、パリには犬を飼っている人はじつに多いようです。個人主義が発達して核家族化が進み、一緒に住む相手が少ないので、せめて犬でもという気分かも知れません。

マナーの違いで思い出しましたが、小生が最初にアメリカに行ったときにはアメリカ人は誰もハンカチを持ち歩かないのに気づき驚かされました。じきにその理由がわかり自分もハンカチを持ち歩かなくなりました。アメリカではどんな田舎のトイレに入ってもちゃんとペーパータオルが用意してあります。もっとも空気の乾燥していることも関係しているかも知れません。西部劇に出てくるカウボーイたちが川の中をザブザブと入って、その後平気で旅を続けるのを見て、濡れたズボンをはいたままでいられるなんて、なんて無神経なんだろうと思ったこと

はありませんか。

ヨーロッパの長期にわたるバカンスはつとに有名ですが、筆者はやはり伝統的な日本人の習性を残しているので、夏休みは2週間にとどめました。イタリアとの国境に近い南アルプスで氷河を踏んで山登りを楽しむことにしました。3千mを越す山並みを歩くので、到着後の2、3日は宿の周辺を散歩して身体をならしてから垣間見る白い氷河に挑戦しました。素人の分限をわきまえて氷河の先端をかすめるにとどめましたが、すばらしい眺めと新鮮な大気には満足しました。氷河は白いと決まったものではなく、遠くから見ると黒い氷河もあります。近づくと氷河の運んだ岩が川原の小石のように敷き詰められており、実際の氷はその岩の下にあります。氷河から流れ出る清冽な流れに手を入れて水を飲もうとして止められました。山には、一見不可能と思われるような急斜面にも羊が放牧されているのです。動物

の落とし物に悩まされるのはパリに限ったことではなかった訳です。山に着いて最初の数日は仕事のことを頭からはなれませんでした。2週間が終わりパリに戻る時分にはフランス流の1カ月の休みも悪くないなぁと考えるようになっていました。

フランスの食事はチーズとバターが嫌いでなければ、安いし美味しいし、やはりつい食べ過ぎる傾向にあります。パリに長期滞在している日本人は1万人を越えるとの噂もあり、お金さえだせば上等な日本食を楽しむのは、難しいことではありません。パリのあちこちの街角で開かれるマーケットは、寿司のねたを仕入れるのに格好の場です。甘エビこそ手に入れることは出来ませんでした。まぐろ、いか、たこ、など一応のものはそろえることが出来ます。鯖など新鮮なものを手に入れてしめ鯖にして食べたときには、「秋鯖はパリに限る」と思わず舌鼓をうちました。